

ロマンス諸語における使役構文の統語研究

La syntaxe des constructions causatives dans les langues romanes

辻子 美保子
Mihoko ZUSHI

1 序論

ロマンス諸語には、(1)に示したような2つのタイプの使役構文を持つ言語がある。Kayne (1975) に従い、(1a)の使役構文を faire-infinitive (以下、FI) 構文、(1b)を faire-par (以下、FP) 構文とする。

- (1)a. Maria ha fatto riparare la macchina a Giovanni. (Burzio 1986: 228)
Maria has made repair the car to Giovanni
'Maria had Giovanni repair the car'
- b. Maria ha fatto riparare la macchina da Giovanni.
Maria has made repair the car by Giovanni
'Maria had the car repaired by Giovanni'

使役動詞はある種の節構造を補部にとる。節構造というのは、それが動作や経験の主体（被使役者）を含む事象を表すからである。この使役動詞の項構造はどの言語にも共通していることだが、被使役者やその事象が統語的にどのように具現されるかは、言語間あるいは言語内でバリエーションが認められる。例えば、(1a)では、被使役者は前置詞（あるいは与格を表す）a で表示され、統語的な項の振る舞いを示すのに対し、da で表示された(1b)の被使役者は付加詞的な振る舞いを示す。本論文では、主にイタリア語のデータに基づいて、このような違いがどのような原理から生じるのかを解明していく。また、使役構文の一般的特性である単一節的特性についても取り扱う。使役動詞の持つ項構造から、使役構文はある種の複文構造を持つと考えられるが、その一方であたかも単文のような振る舞いを示す。この単一節的特性に関して、先行研究では動詞編入という概念を用いて原理的な説明を与える分析がなされている（Guasti (1991, 1992) 等参照）。本論文では、そのような分析の理論的問題点を指摘し、それに代わり、使役動詞の補部が認可のために主節動詞の指定部に移動するという分析を主張する。

2 使役構文の統語的特性

2.1 補文主語の統語的特性

先行研究では、(1)に挙げたような2種類の使役構文において、被使役者を表す句の統語的振る舞いが異なることが明らかにされている。特に、(1a)のような FI 構文の被使役者は統語的な項としての特性を示すのに対して、(1b)のような FP 構文の被使役者は付加詞の特性を示す（詳細は Burzio (1986), Guasti (1992), Zubizarreta (1985) 等参照）。以下ではこのことを示す証拠をいくつか挙げる。

まず第一に、FP 構文において被使役者の生起は随意的であり、一般的な付加詞の特性を示す。すなわち(1b)において、da Giovanni を欠いても文の文法性に影響はない。一方、(1a)の a Giovanni の生起は義務的であり、その欠落は非文法性を生じる。このことは、FI 構文の被使役者は統語的な項であると考えられる。

FI 構文の被使役者の項としての特性は、再帰代名詞の束縛関係からも支持される。(2a)に示したように、被使役者それ自身が再帰代名詞の先行詞となることができる。

- (2)a. Con le minacce, fecero accusare **se stesso**, a Giovanni. (Burzio 1986: 264)
 with the threats, (they) made accuse himself to Giovanni
 'With threats, they made Giovanni accuse himself'
- b. *Con le minacce, fecero accusare **se stesso**, da Giovanni.
 with the threats, (they) made accuse himself by Giovanni
 'With threats, they had himself accused by Giovanni'

一方、FP 構文の場合、(2b)に示したように、その被使役者は再帰代名詞の先行詞となることはできない。この振る舞いは、(3)の受動構文に現れる動作主句 da-NP のような付加詞に見られる特徴である。

- (3) *Fu accusato **se stesso** da Giovanni. (Burzio 1986: 264)
 was accused himself by Giovanni

さらに、同様の結論が数量詞束縛から得ることができる。数量詞 *ciascuno* 'each' は複数名詞句を先行詞としてとり、その場合、先行詞によって C-統御されなければならないという制約がある。従って、構造上高い位置に生じた *ciascuno* はそれよりも低い位置、すなわち、それが C-統御されないような位置にあるものを先行詞としてとることはできない。この数量詞を使役構文の中に生起すると、次のような結果が得られる。

- (4)a. Giovanni farà invitare una ragazza **ciascuno**, ai suoi amici. (Burzio 1986: 263)
 Giovanni will-have invite one girl each to his friends
 'Giovanni will have his friends invite one girl each'
- b. *Giovanni farà invitare una ragazza **ciascuno**, dai suoi amici.
 Giovanni will-have invite one girl each by his friends
 'Giovanni will have one girl each invited by his friends'

(4a)に示されたように、FI 構文では数量詞が被使役者の a NP を先行詞としてとることができ、すなわち、被使役者が補文の目的語を C-統御できるような構造上高い位置にあることを示唆している。一方、FP 構文では、(4b)に示したように、数量詞が da NP 内の名詞句を先行詞としてとることはできず、補文の目的語を C-統御できるような位置にないことを示している。¹

2.2 補文動詞に関する制約

FP 構文の被使役者は受動構文の動作主句と同じ前置詞を伴うことから、FP 構文の補部と受動構文の共通性は以前より指摘されている (Kayne (1975), Burzio (1986))。しかしながら、Guasti (1991, 1992) は、FP 構文の補部と受動構文とは異なる操作が働いていることを主張している。

まず Guasti は、FP 構文の補部には現れ得ない動詞が受動化の適用は受けるという点を指摘している。(5)に示したように、動作主項をとらない動詞は FP 構文の補部に現れることができない。²

- (5) a. *Maria ha fatto vincere il premio da Franco. (Guasti 1992: 114)
 Maria has made win the prize by Franco
 'Maria has made Franco win the prize'

- b. *La grandine ha fatto temere un disastro dai contadini.
 the hail has made fear a disaster by the farmers
 'The hail has made the farmers fear a disaster'

しかしながら、(5a,b)の補文動詞を受動化することは可能である。

- (6)a. Il premio è stato vinto da Gianni. (Guasti 1992: 114)
 the prize has been won by Gianni
 'The prize has been won by Gianni'
- b. La grandine è temuta dai contadini.
 the hail was feared by the farmers
 'The hail was feared by the farmers'

このことは受動構文とは異なった原理が FP 構文の補部に働いていることを示唆している。

ここで留意すべきことは、(5)で示したような補文動詞に関わる制約は、FI 構文には見られないという点である。動作主項をとらない心理動詞などでも FI 構文に埋め込むことができる。

- (7) Questo lo ha fatto {apprezzare/temere/ammirare} ancora di più a Mario.
 'This made Mario {estimate/fear/admire} him even more'
 (Belletti and Rizzi 1988:302)

また、FP 構文と受動構文の相違は潜在的動作主の有無にも現れる。受動構文には、da NP の生起にかかわらず動作主が存在が認められる。このことは、(8a)に示したように、たとえ da NP がなくとも、理由節の生起を許す、すなわち理由節の主語を制御できる潜在的動作主があることから裏づけられる。

- (8)a. Questo monumento è stato costruito (dall'architetto Nervi), per ottenere appoggi politici.
 'The monument has been built (by the architect Nervi), to obtain political support'
- b. Il sindaco ha fatto costruire il monumento (dall'architetto Nervi), per ottenere appoggi politici.
 'The mayor made build the monument (by the architect Nervi), to obtain political support'
 (Guasti 1992: 111)

一方、FP 構文に理由節を付け加えると、(8b)のように、主節主語 il sindaco 'the mayor'と理由節の主語を同一指示とする解釈は可能だが、被使役者 l'architetto Nervi 'the architect Nervi' と理由節の主語とを同一指示とする解釈は不可能である。

以上のことから、FP 構文の補文には動作主という意味役割を担った句がなく、この点で受動構文とは異なっていることが分かる。Guasti (1991, 1992) では、この FP 構文の特徴を受動名詞形にも見られる被影響性の条件 (Affectedness Condition)が関与していると主張されている。これについては、第3節で検討することにする。

2.3 使役構文の単一節的特性

これまででは、2種類の使役構文の相違点に着目し、各々の統語的特性を記述してきた。ここでこの2種類の使役構文の共通点、すなわち使役構文一般に見られる単一節的特性を概観しておく。

単一節的特性を示す第一の例は、接辞上昇という現象である。(9a)に示したように、FI、FP 構文共

に、補文の動詞の目的語として生成された接辞は主節の使役動詞の前に現れ、あたかも使役動詞の目的語であるかのような振る舞いをする。

- (9)a. **La farò riparare** {a Giovanni/da Giovanni}. (Burzio 1986:256)
 it will –make repair {to Giovanni/by Giovanni}
 ‘I will make Giovanni repair it’
- b. ??**Farò ripararla** {a Giovanni/da Giovanni}
 will-make repair-it {to Giovanni/by Giovanni}
 ‘I will make Giovanni repair it’

接辞上昇は義務的であると言え、接辞が補文の動詞に付加した(9b)の容認性は極めて低い。

第二の例は、使役構文を受動化した場合である。この場合、補文の動詞の目的語が主節の主語位置に生起する。³

- (10) **La macchina è stata fatta riparare** {a Gianni/da Gianni}. (Burzio 1986: 258)
 the car has been made repair {to Gianni/by Gianni}
 ‘The car has been made to be repaired by Gianni’

この長距離受動化の事実も補文の目的語があたかも使役動詞の目的語であるかのような振る舞いをすることを示している。このような単一節的特性については、ロマンス諸語における分析的使役構文と他の言語の形態的使役構文との比較なども含めて、第4節で詳しく議論することにする。

3 使役構文の構造

3.1 FP 構文と被影響性の条件

2.2 節では、FP 構文の補文には被影響性の条件が関与している可能性を指摘した。この節では、この問題を詳しく検討し、使役構文の構造を明らかにしていく。

被影響性条件は受動名詞形や中間態構文を制約するとされている (Anderson (1977), Jaeggli (1986))。英語の名詞句は2つの形態をとる。1つは、主要部名詞の動作主項が所有格で表示され、その主要部に先行し、名詞の対象項が前置詞 *of* を伴い後置される(11a)の形態である。もう1つの形態は、(11b)のように、主要部に先行し所有格で表示されるのが主要名詞の対象項であり、動作主項は *by* を伴って現れる、受動名詞形と呼ばれている形態である。

- (11)a. the barbarians’ destruction of Rome
 b. Rome’s destruction by the barbarians

受動名詞形は被影響性の条件によって制約される、すなわち主要部が内項に意味上ある影響を与える場合にのみ、その外項が脱落し、付加詞として現れることが許される (Jaeggli (1986))。従って、内項(対象)に影響を与えないような心理述語の場合、受動形態は非文法的となる。⁴

- (12)a. *storms’ fear by Mary
 b. *the job’s loss by John
 c. *the prize’s winning by John

本論文では、この被影響性の条件に関して、意味役割が文の派生に伴って構造的に付与されるという仮説及び完全解釈の原理から説明を与えていく。まず、Bowers (1993)、Hale and Keyser (1993)や Kratzer

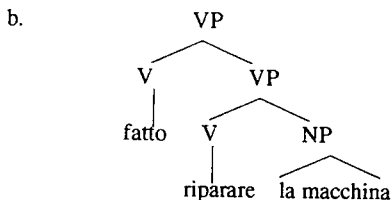
(1996) 等に従って、動作主という意味役割は、主要部が付与するのではなく、主要部とその目的語等を含む句を補部とする機能範疇（ここでは Chomsky (1995) に従い軽動詞 *v* とする）の指定部に併合された名詞句に対し構造的に与えられると仮定する。⁵ また、主要部が語彙的特性として持つ項構造（すなわち、内項）は、完全解釈の原理に基づき義務的に具現化され、具現化された表現は統語的な認可（格、 ϕ 素性の照合）を受けなければならないことを前提とする。この前提に基づくと、例えば(11b)の受動名詞形の場合、動作主項が脱落しても、主要部の内項（対象）が具現化され（すなわち、Rome）、所有格を付与されているので完全解釈原理に違反してはいないことになる。一方、(12)にあるような心理述語の場合、その主要部が語彙的特性として（経験者、主題）という意味役割をもっていると仮定する（Kratzer (1996), Belletti and Rizzi (1988) 参照）。この仮定に基づくと、この2つの意味役割を担う名詞句が必ず統語的な認可を受けなければ、完全解釈の原理に違反することになる。つまり、どちらかの項が脱落することは許されない。また、もし2つの名詞句が共に具現されたとすると、（英語の）名詞句の場合、構造格（所有格）が与えられる位置が1つしかなく、2つの名詞句が共に適正に認可されることができない。従って、(12)の例は非文法的となる。では、どうして(6)に示したように、心理動詞の受動化は許されるのか。これについては、Baker, Johnson and Roberts (1989) に従い、受動構文の場合、経験者という意味役割が動詞の-en に与えられると仮定すれば、動詞が持つ2つの意味役割が付与されることになり、完全解釈の原理に抵触することはない。⁶ この点において、意味役割を付与される形態素を欠いている受動名詞形とそれが存在する受動構文との間に違いが生じるのである。

Guasti (1991, 1992) が指摘しているように、(12)に挙げたような受動名詞形を許さない主要部は、FP 構文に現れ得ない動詞（例文(5)を参照）と同じ種類である。上で述べた被影響性の条件の説明に基づき、次の3.2節では、FP 構文の構造を明らかにする。

3.2 FP 構文の構造

FP 構文の補部と受動名詞形との並行性から、FP 構文の補部においても動作主項の脱落が起こっていると仮定しよう。このことは動作主という意味役割を与えられる位置がないこと、すなわち軽動詞の投射を含まないことを意味する。そこで(13a)のような FP 構文の補部は(13b)の構造を持つと主張する。⁷ 被使役者の *da NP* は随機的に VP に付加すると考える。

- (13)a. Maria ha fatto riparare la macchina (da Gianni).
'Maria had the car repaired (by Gianni)'



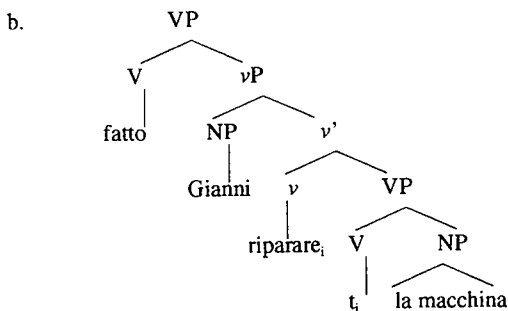
この構造で問題となる点は、補部の動詞の目的語がどのように認可されるかという点である。極小主義プログラムでは、動詞の目的語はその動詞と軽動詞が結合した複合動詞との指定部—主要部一致によって認可される（Chomsky (1995) 参照）。(13b)の補部構造は軽動詞を欠いているため、この方法はとれない。本論文では、この補部の目的語は主節において認可されることを主張するが、このことは第4節で詳しく述べることにする。(13b)の構造で、もし補部の動詞の2つの項が現れたならば、どちらか一方は主節において認可できるが、他方は認可されなくなってしまい完全解釈の原理を満たせな

なくなってしまう。従って、心理動詞のような動作主項をとらない、且つ（経験者、主題）という2つの項をとる他動詞はFP構文に現れ得ないという(5)に例示した事実が説明される。

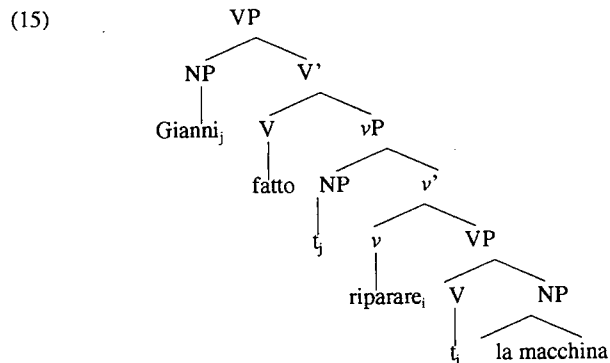
3.3 FI 構文の構造

第2節で FI 構文の被使役者句は、付加詞ではなく統語的な項、特に主語的な特性を持っていることを示した。このことから、その被使役者は軽動詞の指定部に義務的に生起し、動作主役割を与えられると考えるのが自然であろう。(14a)の補部は(14b)のような構造を持つと主張する。

- (14)a. Maria ha fatto riparare la macchina a Gianni.
'Maria made Gianni repair the car'



この構造で問題となるのは、被使役者句がどのように認可されるかということである。(14b)の補部構造においてこの名詞句を認可するような機能範疇はない。本論文では被使役者句が認可のために、(15)に示したように主節動詞の指定部へ移動すると主張する。



この移動の誘因に関しては、Alsina (1992) による FI 構文の意味解釈及び項構造についての議論が有益である。Alsina は、FI 構文には使役者がある事象をひき起こすという解釈に加えて、使役者が被使役者に対して直接的な働きかけをしているという解釈もあることを主張している。Guasti (1992) にも同様の観察が見られ、例えば、(14a)は他の誰でもなくジャンニに車の修理をさせたという解釈を持つとしている。⁸ このことから Guasti は被使役者句は、使役の対象となる事象の動作主であることに加えて、使役動詞から有(害)益者(bene(male)ficiary)という意味役割を付与され、その意味役割に附随する内在格(与格)によって統語的に認可されると主張している。この基本的な考え方を取り入れ、

(15)に示したように Gianni は使役動詞の指定部へ移動し、その位置で内在与格を付与されることによって認可を受けることができるようになることを主張する。⁹

この内在与格による認可の方法は、ある名詞句が何の認可も受けられず、完全解釈の原理に抵触してしまうことを防ぐための個別言語に特有の操作であると仮定する。従って、普遍文法の原理、原則の適用が可能な場合には、そちらが優先される (Chomsky (1995) 参照)。例えば、補部の動詞が非能格動詞の場合、例えば、"Maria fa lavorare Giovanni." のような文では、認可を必要とする名詞句は1つしかないので、内在与格付与の手段を必要とせず、主節の軽動詞によって対格や名詞素性が照合される。従って、非能格動詞の項、すなわち被使役者は前置詞 a を必要としない。

この節ではロマンス語の2つの使役構文の違いについて、その補部の構造の違い及び使役動詞の持つ意味役割という観点から論じてきた。FI 構文と FP 構文の補部の構造上の違いは軽動詞句を含むかどうかという点であるが、どうしてこのようなオプションが許されるのか。使役動詞が2種類の範疇を下位範疇化する語彙的特性をもっているとも考えられるが (Guasti (1992) 参照)、ここでは、これはロマンス語の不定詞の名詞的な特性に起因するものと考えたい。というのも定形動詞の場合、それが動作主を必要とするならば必ず軽動詞句が投射されることと対照的であるからである。ロマンス語の不定詞は、統語的分布などの点で、その名詞的な特徴が指摘されている (Raposo (1987), Kayne (1998) 参照)。不定詞と名詞との共通性、しかも定形動詞との相違点は、前者は人称素性が欠落していることであろう。おそらくはこの人称素性の欠如が軽動詞の投射が随意的であることと関係しているのではないか。主要部の形態的素性が不完全であるのに対応して機能範疇の投射も不完全であり得るというような原理が働いているものと推察される。本論文ではこのような示唆を与えるのみとし、より詳しい分析及び定式化は今後の課題とする。

4 使役動詞の補部の認可

2.3 節では、使役構文の単一節的特性が、接辞上昇や受動化によって明らかにされた。この単一節的特性を説明することは、その補部の目的語がどのように認可されるかという問題を解決することである。この節では、この問題に関して、先行研究で主張されてきた動詞編入を用いた分析を再検討し、さらに補部動詞句の認可について論じる。

4.1 動詞編入

Baker (1988)はチチワ語のような言語に見られる形態的使役構文では、補部の動詞が使役動詞に編入、すなわち主要部移動をするという分析を行った。これによって、(16)に示したように使役動詞と補部の動詞が結合している事実が説明でき、さらに補部の目的語が使役動詞の影響下に入る (使役動詞によって統率される) ことができるようになることから、その帰結として単一節的特性が導き出されると主張した。

(16) Catherine a-na-kolol-ets-a mwana wake chimanga. (Baker 1988:164)
Catherine SP-PAST-harvest-Cause-ASP child her corn
'Catherine made her child harvest the corn'

Baker はロマンス語等に見られる分析的使役構文の場合、動詞編入が LF のレベルで起こるとしているが、Guasti の一連の論文は、分析的使役構文でも統語的に動詞編入が起こると主張している。この主張を裏付ける経験的な証拠は遊離数量詞の生起に関する事実である。(17)に示したように、主節の主

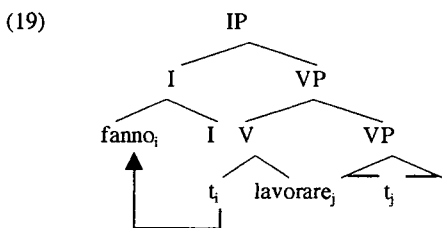
語を修飾する数量詞が補部の動詞の後に現れる。¹⁰

- (17) **I professori_i facevano commentare tutti_i il libro a Maria.** (Guasti 1992: 43)
 the professor made comment all the book to Maria
 'All the professor made Maria comment on the book'

Sportiche (1989)の分析をふまえると、(17)の遊離数量詞 *tutti* の位置は主節の主語が現れた位置ということになる。従って、補部動詞がその遊離数量詞よりも前に現れるということは、その動詞が主節主語の基底位置よりも高い位置（従って線形順序では前）に移動したということになる。Guasti はこの事実に基づき、分析的使役構文においても形態的使役構文と同様、動詞編入が起こっていると主張している。しかしながら、分析的使役構文には形態的使役構文との相違点もある。前者では、使役動詞と補部の動詞は各々独立した語であり、形態的に結合していない。事実、(18)に示したように、副詞などの要素が2つの動詞の間に介在する。

- (18) **Maria fa spesso riparare la macchina a Gianni.** (Guasti 1992: 39)
 Maria makes often repair the car to Gianni
 'Maria often has Gianni repair the car'

Guasti は、Roberts (1991)によって提案された編出 (excorporation) という概念を用いて、(19)に示したように、補部の動詞がいったん使役動詞に編入した後、使役動詞のみが編出し、別の機能範疇に移動するという分析を行った。これによって、動詞編入を仮定しつつも、2つの動詞が独立した語であるという事実が説明される。



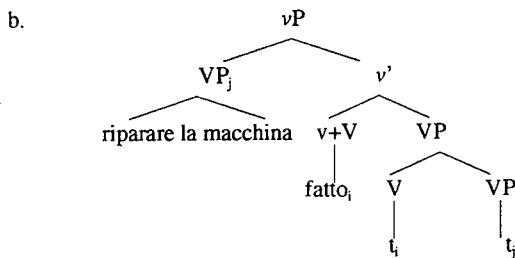
Guasti (1992)の分析をとれば、動詞編入という概念によって分析的使役構文と形態的使役構文を包括的に捉えることができる。しかしながら、この分析にはいくつかの概念上の問題点がある。まず第一に、動詞編入の誘因である。Guasti (1992)では、使役動詞が動詞を下位範疇化することが動詞編入の誘因とされているが、移動または牽引(Attract)の誘因は、それを牽引するものの形態的特性による要請のみに限定されるという極小主義プログラムの見地からすると、この下位範疇化を要因とする考え方は見直す必要がある。第二の問題は、編出という概念についてである。Guasti は分析的使役構文において編出が空範疇原理によって許されるシステムを提示しているが、それがなぜ義務的に起こるのかという問題については言及されていない。¹¹ 以下では、使役動詞の補部の認可という観点からこれらの問題を捉えなおすことにする。

4.2 使役構文の補部の認可： 補部移動

第3節では、使役構文の不定詞補部の内部構造が名詞句のそれと共通性があることを指摘した。また、ロマンス語の不定詞節は、その分布においても名詞句との類似性が先行研究によって指摘されて

いる。¹² この不定詞の名詞性に着目し、本論文ではロマンス語の使役構文の補部は名詞句補部と同様の認可を必要とすると主張する。すなわち、使役構文の不定詞補部は主節の軽動詞の指定部に移動し、指定部—主要部関係を形成することによって認可されると考える (Kayne (1998)参照)。この補部の移動をひき起こす理由として、主節の軽動詞が持つ範疇素性が誘因となっていると仮定する。3.2 節で議論した(13a) (以下に(20a)として再現) のような FP 構文は、(20b)に示したような派生の段階をふむ。

(20)a. Maria ha fatto riparare la macchina (da Gianni).



使役動詞は軽動詞に付加し、その指定部に補部動詞句が移動している。これによって、軽動詞の範疇素性と補部動詞句のそれとが照合される。この段階の後、主語 Maria や機能範疇 T が併合され、使役動詞が T に、そして主語が T の指定部にそれぞれ移動することによって(20a)が派生される。

使役動詞の補部の動詞句が移動するという考え自体は新しいものではなく、Burzio (1986) や Baker (1988) にも見られる。しかしながら、これらの先行研究では、補部が完全な節 (Burzio においては S', Baker においては CP) であることが仮定され、その一部分の動詞句が抜き出されるという分析である。本分析の独創性は、使役動詞の補部そのものを動詞句とし、それ全体が主節の機能範疇との指定部—主要部一致による認可を受けるために移動するという点である。

この補部動詞句の移動の帰結は、それに含まれる名詞句、すなわち不定詞の目的語も主節に引き上げられることである。これによって、2.3 節で見た単一節的特性を説明することができる。例えば、(9) に示したように ((21)として再現)、補部内の接辞はほぼ義務的に主節に現れる。補部の接辞も補部動詞句移動によって軽動詞の指定部に引き上げられ、その位置から機能範疇 T に付加することができるようになり、(21a)が派生される。¹³

(21)a. La farà riparare {a Giovanni/da Giovanni}.
it will -make repair {to Giovanni/by Giovanni}
'I will make Giovanni repair it'

b. ??Farà ripararla {a Giovanni/da Giovanni}
will-make repair-it {to Giovanni/by Giovanni}
'I will make Giovanni repair it'

また、(20b)の構造で、移動した動詞句内から、LF レベルで、この目的語が主節の軽動詞の指定部に移動すること、また軽動詞が多重指定部を許すことを仮定すれば、その名詞句の格素性が軽動詞との指定部—主要部一致によって照合されることができ、適正な認可を受けることができる (別の可能性については注 15 を参照)。

さらに、この分析では動詞編入は起こらず、2つの動詞が結合することはないので、上の(18)で示した事実、すなわち副詞が使役動詞と不定詞の間に介在する事実も正しく予測することができる。

補部の認可という観点については、FI 構文についても同様の分析を行う。(22a)は(22b)に示したような派生を持つ。

(22) a. Maria ha fatto riparare la macchina a Gianni
'Maria made Gianni repair the car'

b. [_{vp} [_{vp} t_i riparare la macchina]_j v+fatto [_{vp} [a Gianni]_i t_v [_{vp} t_j]]

3.3 節で述べたように、FI 構文の被使役者句は主節動詞の指定部に内在与格照合のために移動する。その後、(22b)に示したように、補部の軽動詞句（被使役者句の痕跡を含む）が主節の軽動詞の指定部に認可のために移動する(Kayne (1989)参照)。この移動によって、被使役者が文末に来るという正しい語順が得られる。¹⁴

5. 使役構文の類型

前節では分析的使役構文においては動詞句移動が関与していることを主張したが、形態的使役構文については何も言及してこなかった。この節では形態的使役構文を含めた使役構文の類型について簡単に述べることにする。

(16)に挙げたような形態的使役構文については、本論文も Baker (1988)による動詞編入に基づく分析を採用する。動詞編入の誘因については、分析的使役構文における動詞句移動と同様、使役動詞の範疇素性が牽引すると考えるのが自然であろう。形態的使役構文の一つの特徴は、使役動詞（あるいは動詞一般）が接辞であることである。この使役動詞の形態的特性から、義務的な動詞編入が必要となる。補部である動詞句の認可は、その補部の主要部である動詞が使役動詞に編入することによって満たされると考える。従って、補部の動詞句全体が移動する必要はなくなり、経済性の原理によってそのような移動は排除される。一方、分析的使役構文においては、使役動詞に接辞という形態的特性がなく、動詞編入をひき起こすことはできないと仮定する。従って、前節で論じたように、補部の動詞句全体が移動することによってのみその補部が認可されることになる。簡単にまとめると次の通りである。形態的使役構文も分析的使役構文もその補部は動詞句であり、その補部の認可は主節動詞による素性照合によって為される。その照合の仕方には二通りあり、一つは動詞編入、もう一つは動詞句移動である。前者は形態的使役構文の場合に、また後者は分析的使役構文の場合に使われる。

ここまででは使役動詞の補部が動詞句であることを仮定してきたが、補部が動詞句よりも大きな範疇であるような使役構文があることを否定するものではない。Guasti (1996)では、イタリア南部の方言(Arbëresh)の使役動詞が接続法の補部をとるという観察がなされ、その補部の構造はMP (Mood Phrase)であると主張されている。¹⁵ また、(23a)に挙げたような英語の使役構文も、その補部は動詞句よりも大きな範疇であろう。

(23)a. I made John sing a song.

b. John was made to sing a song.

(23a)は主節が受動化されると、(23b)のように補部が to で表示される。少なくとも(23b)のような受動化された使役構文の補部は、不定詞節の標識である to の生起する位置、すなわち、ある機能範疇を含む動詞句よりも大きな範疇であると言える (Pollock (1994) 参照)。このような場合、補部内部の動詞や軽動詞はその機能範疇によって認可されるため、上で述べたような動詞編入や動詞句移動というプ

ロセスによる認可の方法は不必要となる。もし英語の使役構文の補部が常に動詞句よりも大きな範疇であるならば、補部の動詞の項構造が完全に具現化され得ることになり、従って動作主項の脱落は許されないことになる。このことは英語にはなぜ FP 構文が存在しないかということへの説明となる。では英語の場合、なぜロマンス語の使役構文、特に FI 構文のような構造をとらないのか。この問題に対する明確な答えを得るためにはさらなる研究が必要であるが、その手がかりとなることは、英語の不定詞自体にロマンス語に見られるような名詞的特性がないということであろう。¹⁶ おそらくはこの名詞性の欠如から不定詞を投射する場合に、それを認可するような機能範疇が必要となるのではないかと思われる。

以上の議論をまとめると、諸言語の使役構文は次のように3つに分類される： (i) 動詞句を補部とする形態的使役構文、(ii) 動詞句を補部とする分析的使役構文、及び (iii) 動詞句より大きな機能範疇を補部とする分析的使役構文。最初の2つの使役構文の場合、補部の動詞句が外の要素によって認可を受ける必要性が生じるために動詞編入や動詞句移動が起こると結論づけることができる。

註

¹ FP 構文の被使役者句同様、受動構文の動作主句もまた数量詞 *ciascuno* 'each' の先行詞となることはできない。

(i) *Una ragazza **ciascuno**, fu invitata dai suoi amici, (Burzio 1986: 263)
one girl each was invited by his friends

² 正確には、その目的語がその動詞によって表されることによってある種の影響を受けていない (unaffected) ようなタイプの動詞である。

³ フランス語の使役構文では、イタリア語同様、接辞上昇は認められるが (i)参照)、(10)のような長距離受動化は非文法性を生じる (ii)参照)。

(i) Jean la fait manger par/à Paul. (Kayne 1989: 242)
Jean it-makes eat by/to Paul

(ii) *La maison a été faite construire (par Casimiro). (Zubizarreta 1985:268)
'The house was made to be constructed by Casimiro'

なぜフランス語の使役構文では長距離受動化が非文法性を生じるのかは現時点では明らかではない。このイタリア語とフランス語の違いについては、Guasti (1992, 1996)を参照。

⁴ 受動名詞形も、FP 構文と同様、理由節の主語を統御することはできない。

(i) *The city's destruction to prove a point.

このことは、受動名詞形には潜在的動作主が存在しないことを示している。

⁵ Chomsky (1995) における軽動詞句は、Bowers (1993) の pred(icate) phrase、Kratzer (1996) における (active) voice phrase という機能範疇句に相当する。ここでは便宜的に Chomsky による軽動詞句を用いる。

⁶ あるいは、受動構文には虚辞の *pro* が基底の主語位置に生成され、これに外項が与えられるという仮説 (Guasti (1992) 参照) においても、同様の説明が可能である。

⁷ Li (1990)に従い、使役動詞の補部は時制などの機能範疇を含まないことから動詞句であるとする。

⁸ (13a)のような FP 構文は、マリアが車を修理させたのはたまたまジャンニであったという解釈をもち、使役者が直接的に被使役者に対して働きかけをしたという解釈はない (Guasti (1992) 参照)。

⁹ 内在格は動詞の意味役割と結びついているものなので、意味役割の付与と同様、その動詞の領域内で、すなわち機能範疇を介さず、為されるものとする。この点においては、指定部—主要部の関係で行われる構造格や素性の照合とは異なる。

¹⁰ しかしながら、この Guasti の主張は、Belletti (1990) が指摘している次のような事実によって弱められる。Belletti によれば、若干容認性は落ちるものの、遊離数量詞は使役動詞と不定詞の間にも生起することができる。

- (i) ?Faranno tutti leggere quella pagina a Gianni. (Belletti (1990:136, fn. 56))
Lit. they will all read that page to Gianni.

この事実は、不定詞の使役動詞への編入が起こっていないか、あるいは Guasti が主張しているような不定詞の動詞編入から使役動詞の編出までの一連のプロセスのうちのあるステップが起こっていないことを示唆するものであり、Guasti の分析に対する問題となっている。

¹¹ また、これに関わる技術的な問題は、(17)における使役動詞—不定詞—遊離数量詞の語順を説明する際の(i)のような派生である。

- (i) [_{TP} I professori [facevano commentare]_j [_{VP} tutti t_j t_i ...]]

不定詞が使役動詞に編入し、複合動詞を形成した後、その複合動詞が機能範疇 T へ主要部移動をし、さらに、その複合動詞から使役動詞が編出によって抜け出すという派生である。不定詞—遊離数量詞という語順を出すには、複合動詞が T に付加するというステップが必要だが、この移動を誘因するものは何か、そして複合動詞から使役動詞のみが抜け出すのはなぜかという点が不明瞭である。

¹² ロマンズ語の不定詞が名詞性を持っていることは、(i)に示したように、不定詞節が冠詞に後続するという事実などによって支持される。

- (i) il mangiare la carne il venerdì (Kayne 1998)
the eat-inf the meat the Friday

¹³ (21b)の容認性の低さは、補部内に接辞が付加できる機能範疇がないことによると考えることができる (Kayne (1989) 参照)。

¹⁴ この分析で問題となるのは、(17)に示した使役動詞—不定詞—遊離数量詞という語順がどのように導き出されるかという点である。本分析では、補部の動詞句全体が移動するので、その動詞と目的語の間に主節主語を修飾する要素が介在することは予測できない。1つの解決策としては、まず補部の目的語が素性照合のために主節軽動詞の指定部に移動した後、その痕跡を含む動詞句が主節に移動するという方法である。目的語と動詞句の移動が独立していると考えれば、不定詞—遊離数量詞という語順を派生することができる。

¹⁵ 次の例に示されているように、この方言の使役構文では、2つの動詞に時制や一致を示す動詞の屈折が見られ、補文は接続法節を導く標識 (SP)、t_eを伴い、その動詞は接続法となる。

- (i)a. Maria bon t_e shurbenj Frankun. (Guasti 1996: 223)
Maria makes SP works Frank-Acc
'Maria makes Frank work'
b. Maria i bon t_e ghøjimj ghibrin ghajarellit.
Maria to+him SP reads book-Acc child-Dat
'Maria makes the child read the book'

¹⁶ オランダ語のような他のゲルマン語においては、英語とは異なり、不定詞の名詞的な特性が観察され (Hoekstra (1999))、また FP 構文も存在する (Guasti (1991))。このことから不定詞の名詞性と FP 構文の有無には相関関係があることが推測される。

参考文献

- Alsina, A. 1992. On the argument structure of causatives. *Linguistic Inquiry* 23:517-555.
Anderson, M. 1977. NP-preposing in noun phrases. *Proceedings of the 8th Annual Meeting of the North Eastern Linguistic Society*. University of Massachusetts, Amherst.
Baker, M. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
Baker, M., K. Johnson and I. Roberts. 1989. Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20:219-251.
Belletti, A. 1990. *Generalized Verb Movement*. Torino: Rosenberg & Sellier.

- Belletti, A. and L. Rizzi. 1988. Psych-verbs and θ -theory. *Natural Language and Linguistic Theory* 20:219-252.
- Bowers, J. 1993. The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24:591-656.
- Burzio, L. 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Giorgi, A. and G. Longobardi. 1991. *The Syntax of Noun Phrases: Configuration, Parameters and Empty Categories*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Guasti, M.T. 1991. The *faire-par* construction in Romance and in Germanic. *Proceedings of WCCFL* 9:205-218.
- Guasti, M.T. 1992. Causative and Perception Verbs. Doctoral dissertation, Université de Genève.
- Guasti, M.T. 1996. A cross-linguistic study of Romance and Arabic causatives. In *Parameters and Functional Heads*, ed. A. Belletti and L. Rizzi. Oxford: Oxford University Press.
- Hale, K. and J. Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20*, ed. K. Hale and J. Keyser. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hoekstra, T. 1999. Parallels between nominal and verbal projections. In *Specifiers: Minimalist Approach*, ed. D. Adger, S. Pintzuk, B. Plunkett, and G. Tsoulas. Oxford: Oxford University Press.
- Jaeggli, O. 1986. Passives. *Linguistic Inquiry* 17:586-622.
- Kayne, R. 1975. *French Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kayne, R. 1989. Null subjects and clitic climbing. In *The Null Subject Parameter*, ed. O. Jaeggli and K. Safir. Kluwer: Dordrecht.
- Kayne, R. 1998. Prepositional complementizers. Ms. University of New York.
- Kratzer, A. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase Structure and the Lexicon*, ed. Rooryck and L. Zaring. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Li, Y. 1990. Binding and verb incorporation. *Linguistic Inquiry* 21:399-426.
- Pollock, J-Y. 1994. Checking theory and bare verbs. In *Paths Towards Universal Grammar*, ed. G. Cinque, J. Koster, J-Y. Pollock, L. Rizzi, and R. Zanuttini. Georgetown University Press.
- Raposo, E. 1987. Romance infinitival clauses and case theory. In *Studies in Romance Languages*, ed. Neidle and R. Nunez-Cedeno. Dordrecht: Foris.
- Rizzi, L. 1986. On chain formation. In *Syntax and Semantics: the grammar of pronominal clitics*. 19. New York: Academic Press.
- Roberts, I. 1993. Excorporation and minimality. *Linguistic Inquiry* 22:209-218.
- Sportiche, D. 1988. A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure. *Linguistic Inquiry* 19:425-449.
- Zubizarreta, M-L. 1985. The relation between morphophonology and morphosyntax: the case of Romance causatives. *Linguistic Inquiry* 16:247-289.